

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認誌) 第三五二号
昭和四十七年十一月二十五日印刷 昭和四十七年十二月一日発行



第三十八卷

第十二号



1972
12



十二月号

—目 次—

表紙 「太田大光院」松涛達文画

成道会によせて ―おさとの日に思うこと―	金 田 明 進	(2)
私の『この一年』	藤原了然・藤堂俊章	(4)
臘月の行事		(7)
法然上人の世界(三) 一枚起請文にみちびかれて	梶 村 昇	(8)
快樂と快樂 ―武田泰淳氏の近著に寄せて―	竹 中 信 常	(12)
「心のささえ」	杉 田 義 俊	(16)
韓国の寺めぐり	安 居 香 山	(18)
聖典解説 浄土宗の陀羅尼(だらに)〈下〉	真 野 竜 海	(23)
異僧真覺〈第十二回〉	柴 田 六五郎	(26)
「道」 広谷への道	高 橋 良 和	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて		(32)

語和声念



年末になると新年を迎えるために各家庭でも大掃除を行うが、浄土宗の総本山知恩院においては、毎年十二月二十五日に法然上人の御尊像をお清めする行事がある。この儀式はお身拭式と称し、約三百年続いているそうだ。当日は普段大殿中央のお厨子の中に安置してある御尊像を、一山僧侶が木魚を叩きながら唱えるお念仏に信徒や参詣者が唱和する中を、数人の僧侶によってお厨子の中より特別に準備された内陣正面の台の上に一時御遷座し、このお念仏唱和の中を御門主はじめ執事長、法務部長等が羽二重の布きれて御尊像をお清めする。勿論その間に数人の僧侶によりお厨子の掃除も行われる。それが終わると、再び、先刻御遷座した僧侶によって御尊像をお厨子に安置し、あらたにお灯明を上げ、お供物をお供えして一山像侶の読経をもってお身拭式を終了する。なお、このお身拭式に使用された羽二重の布きれば、御門主自ら使用年度を記入なされ、お身拭袈裟として作られるそうである。当日はまた一人前の僧になるための加行（伝宗・伝戒）をしている修行僧（毎年百名以上）が丁度三週間の修行が終る行満の日にあたり、この吉日にお身拭式に参列して加行道場が終了する。この年末の行事であるお身拭式は莊嚴であり、僧俗一体のお念仏唱和は、いかにもお念仏の元祖様、法然上人の御尊像をお清めするのにふさわしい儀式である。また参列者一同も、この一年間を反省するとともに、我が心を清めねばなるまい。

法然上人が浄土宗をお開きになられてから八百年にあたる、浄土開宗八百年も、いよいよ明後年、昭和四十九年に迫った。この数年間開宗八百年を迎えるため、各本山はじめ浄土宗七ヶ寺の寺院は努力している。この開宗八百年を迎えるにあたり一番重要なことは、浄土他力念仏を各個人個人の信仰として浸透せしめるように、おてつぎし、おかげさまを喜ぶ幸福な住みよい社会を作ること全力を傾けることである。

（佐藤行信）



成道会によせて

— おさとりの日に思うこと —

茨城県取手市弘経寺住職 金 田 明 進

深い秋がすぎて、霜に木の葉がおちてしまうと、師走の月がやってくる。寒い北風が身にしみるころ、十二月八日、それは仏教徒にとっては、お釈迦さまのおさとりの日として記念すべき日です。お寺の行事としてはよく実行されていますが、家庭の行事としてはまだ徹底されていない、ただ「臘八の接心」など云々と、禅堂などで心静かに坐って何か心のおちつきを見出したいと思います。

二千五百年の昔、お釈迦さまが六年間も苦行をされて、人間の本来に生きる道を求められ、ついにその道を得て仏となり給うた、その記念日です。

皇太子の位をすて、妻子をすてて、ひとすじに人間の生、老、病、死等の苦しみを解決したいとお釈迦さまは願ったのです。生存競争、弱肉強食の世界を目のあたりみて、どうか争いのない平和な世界に通じる道が得たいと、お城をぬけ出

てから奥山に入り、冥想にふけったり、先輩の修行者に質ねたり、学者に道をきいたり、おそろくこの六年間の修行はお釈迦さまにとって、言葉に云い現わせない真剣そのものであったでしょう。あるときは断食をしたり、あるときは石の上に坐ってみたり、人間はこの肉体があるから、それに邪魔されて本当の心もちが現われないのだと考えたりしたのでしょう。そして骨と皮ばかりにやせ衰えて、ひたすらに人間の本当の道を求めつづけられました。

これは他人にきいてもわからない、どうしても自ら発見しなければならぬ道だと決心して、お釈迦さまは菩提樹の下、やわらかい草の上に静かに坐わり、深い冥想に入り「もしこの道を発見出来なかったら、たとい死すともこの座を起つまい」と固く決心されたのでした。そして六日はすぎ七日目の払曉、あけの明星かがやくころ、お釈迦さまは堅く坐っ

た膝をハタと打たれて心の中に「そうだ、わかった！」と叫ばれて、晴やかなお顔になられたのでした。

これが十二月八日の朝、おさとの朝と申してよいのです。でもその「わかった！」と云うおさとりを私たちはただ神秘的なものとは考えません。それは本当の人間の道がわかりになったのです。ちょうど真つ暗な夜のとぼりが明けひらけて、天地が大いなる昇りくる太陽の光りに照し出されて、新しい朝が明けたように、お釈迦さまは大いなる目ざめ、正しい目ざめを成しとげられたのでした。

このことをお経の中では「もろもろの神々もみな歓喜して、清らかなそよ風がどこともなく吹いて、とりけものは声をひそめ、草木はゆるがず、行く雲はゆるやかに、塵一つないきよらかな天地であった、ああこれがお釈迦さまがおさとりになったときの光景だ、このときお釈迦さまは菩提樹の下に南無仏、と誓いのことをとなえられた、天地にみつる神々はよろこび踊り上ってお釈迦さまを讃えられた」と記されています。

おそらくお釈迦さまが南無仏と合掌されたのは、今まで気づかなかったことに、ハッと気づかれ、この私が山川草木、日月大氣、天地一切のものに生かされている「ありがたい！」「我れ生かされることの尊さ」に合掌されたのでありま

しょう。今までの暗くとざされた心もち（無明）が一週間の冥想の結果バツと明るくなり、生、老、病、死の苦しみも解決されたでしょう。それは真の人生、仏の道に灯された大光明であつたにちがいありません。

成道とは成仏、得仏、得道、成正覺とも申し無上道を成ずるとも云われます。成仏とは本当の正しい人間になることです。得道とはその道を体得することです。そして無上道とは、どこまでも止る所を知らずに進みゆく道のことです。研究も改善も、生あるかぎり押し進めゆく道を無上道と云い、お釈迦さまはおさとりによってこの道を成しとげられたのでした。仏教の云うボダイ・ネハンとはこのことを意味するものと私は教えられました。

肉体を虚けて心の世界を尊しとする苦行の道はも早や人間の真の道ではない、この肉体が正しい衣、食、住を得て世に奉仕し得てこそ尊いのであると気づかれにお釈迦さまでした。菩提樹下に静かに坐わられたお釈迦さまは宇宙、悠久の祖孫に流れてやまぬ生命の大進動を十二月八日の晩に大発見されたのでありました。仏教はここから新しく偉大なる進展がはじまり、二千五百余年後の今日私どもは心を新たにしておさとの日、成道会をお迎えいたしましょう。

私の『この一年』



— 仏教大学学長 —

藤 原 了 然

が願われてならない伝統である。

お雑煮の後、直ちに仏教大学の仏前で、新年の勤行におもむく。集るものは数人であるが、昨日とは打って変って春を寿ほぐ気分が横溢している。五日には、専任教職員全体の互礼会、殆んど全員と喋っていい出席率で、なごやかにお屠蘇を交わす。七日になると、通信教育部の補講開始、学生諸君の老若を問わない熱心さに正月気分もおあづけの格好となる。

それでも八しめの内Vの間は、まづは軽い正月の会合などのノンビリムードであったが、一月の後半からはなかなか多忙を加えた。実は昨年はじめから仏教大学図書館建設資金の勸募が、その仕上げの期を迎えていたわけである。

(二)

一月二十六日、仏教大学前学長恵谷先生の古稀並に記念論文集贈呈式が都ホテルで大変な盛会の下に行われた以降は、時節のよい加減か、結婚式や地方出張の講習会兼勸募依頼の

(一)

元旦だけは素直に朝のおつとめを如法にする。暮れに仏前に手向けた正月用お花、恒例によるおかざりを供えた仏前回は、また格別の風趣が感ぜられる。過去何百年間か繰返えされ、また未来に向っても恐らくいつまでも続けられること

用件が続出して、ちょっと数え切れないほどである。四月十七日から四日間、仏教大学通信教育部の台湾出張講座を担当することになっていた。会場は台南の高雄県阿蓮郷の光徳寺であるが、はじめての渡台であり、学生が日本語の解る年齢の僧侶並に居士や大姉である。その熱心さに驚ろくと共に、近在の在家の幼児が仏前での五体投地の礼拝は、まことに敬虔そのものであった。住持浄心法師の教化には感嘆の外はなかった。

帰国後は相い変らずの多用にして多忙。六月九日、畏兄故香月乗光教授の追悼講演会。すぎし日を偲んで感無量。

(三)

貧寺のささやかな八月盆がすぎると、図書館の竣工式(十月二十二日)と仏教大学開学六十周年の準備に迫られる。何にしる図書館の方は、四千五百人からのひとびとのご協力を仰いだわけであるから大変である。それでも当日には、宗門内外の参加をえて好天に恵まれ、滞りなくこの両日を盛會裡に迎えたことは、仏祖の冥裕をしみじみと痛感せざるをえないものがある。

菊花窓前に薫る秋もまさに後半を迎えようとしているとき、この年なすべくしてなしえなかった多くのこと、またこ

れからなすべき少からぬ事々を思い浮べるとき、微力をしみじみと痛感すると共に、勤めずんばあらずの情切々。どう考えても△温故知新△という古今の名言は、人間生きる限りの指針のようである。

暁のしじま破りて赤々と

もえし命の椿 地に落つ

藤 堂 俊 章

(和歌山県田辺市竜泉寺住職)

この一年は私にとって一番思い出ふかいものとなった。二月二十五日午前二時半、三十二年ともに暮してきた妻が五十六歳の生涯を閉じ、お浄土に還ったのである。心臓弁膜症の妻は忙しい寺務と、年間二百日以上も全国布教で私が不在の寺を守り、四人の子供を育ててきた元氣さであったが、ここ四、五年は極度の過労で随分弱っていた。急に腹痛を訴え、

入院わずか一週間、約束の布教を果すため私が看病したのは二日間。腸間膜動脈血栓症で衰弱甚だしく、心臓弱きため手術もできずに終った。

生命が元にもどらざることを宣告されたので「往く先は分っているか」と私がたずねると、はっきり

「お父さんに教えて頂いていますから、よく分っています」と答えたので、私はどれだけ安心したか知れない。三尊来迎図か曼陀羅図絵を枕頭にも思っていたが、その必要はないと感じ、瞑目するまで数時間、妻の呼吸に合わせてお念仏を不断につづけた。その間に語った言葉は医師・看護婦さんへのお礼と、檀信徒に大変お世話になったが十分のことをしてあげられなかったとお礼とお詫び、四人の子供らの長所美点をほめて協力して仲よく幸せに暮すようにと申し、私には長い間お世話になりましたが十分のお手伝いができずにすみませんでしたと申し、お浄土へ帰らせて頂くのがはっきりしているから注射など不自然なことは止めてほしいといいました。

そしてボツリボツリ次のように申ししたのであります。

「これから向うの岸へ往くのです」

「流れが急で濁っている」

「大ミオヤさまが向うでニッコリ笑って待っていてくださる」

「上の方から、うす紫やうす桃いろのきれいな花が沢山舞っておりてくる」

それからは一切の苦痛がなくなり、文字通り禪定に入るが如く大ミオヤさまの帰還の御指図に従いました。

「ただの時によくよく申しおきたる念仏によりも、臨終にならず仏は来迎し給うべし。仏の来迎し給うを見たてまつりて、行者正念に住す」という法然上人のお言葉を身にしみて実感いたし、心から亡妻に感している日々であります。どれだけ大勢の人を救うよりも、一人の妻を救い得た喜びは大きい。

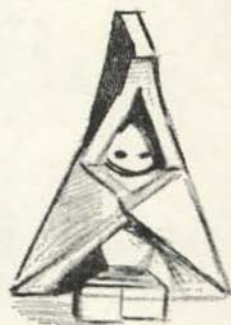
生きる上の病気の苦しみを無くし、死の怖れを無くした妻は死んだと思えず、お浄土に観音菩薩と同じ身を以て、今現に永遠に生きて、うつし世に縁を結んだ人々を導いていると信じています。

むづかしかった長男の配偶者もその後きまり、去る十月二十一日挙式し、翌二十二日私は満三十年の住職を辞任して長男が竜泉寺第二十一世の法燈を継ぎ、長女は明春挙式、次男も明春京都市内に晋山の予定となりましたことどもはみな清浄院光譽妙月聖容大師の導きと信じ、私は余生を布教伝道に捧げて、亡き妻への香華といいたす覚悟でございます。

臘月の行事

十二、は臘月ともいわれる。それは、むかし狩獵を生活の糧としていた獵師たちが、一年間の獵によって得た恵みに対し感謝し、祖先のご恩に報いるために獲ものを供えてお祭りをする行事があったので、この月を臘月といい、それがやがて臘月にかわつたのだと一般にいわれている。農耕の社会にいたって、臘月に農業の一年間の終りを感謝し、祖霊に穀物や果実をお供えして祭る習慣もあった。その場合供える穀物で粥をつくって食したともいう。

お釈迦さまが、お悟りを開かれた日は十二月八日であるが、この八を臘日としてお釈迦さまの成道をよろこび、お寺では施粥をし、この臘八粥には除疫延命の功德があるといわ



れた。また臘八接心といつて一日から八日まで、禪寺では成道を記念して一切の行事をおこなわず、只坐禪を修行して、八日の暁方、ちようどお釈迦さまが暁の明星のきらめく頃、豁然とお悟りを開かれたという故事にならうて終るのである。

仏名会もなつかしい行事である。過去、現在、未来の諸仏のみ名を唱えて、一年中の罪障を懺悔消滅する法会である。この行事は、毎年十九日より三日間おこなわれた。浄土宗でおこなわれる仏名会は、専ら阿弥陀仏の名を唱えて、懺悔滅罪し、身心清浄にして新年を迎えるのである。

やがて十二月も末になり二十五日には、京都東山知恩院においては、お身拭い式の行事

がおこなわれる。諸堂のススハライをおこなう、最後に大殿に集り、元祖法然上人のお木像の御身体を御門主親下がみずから拭い去り諸められる。その間各諸者はお念仏を唱えてひたすら罪障消滅をねがい、一年の無事を感謝し、来るべき新しい年に祈りを捧げるのである。二十五日は元祖さまの御命日でもあり、ちようど僧侶になるための修行、いわゆる加行が成満する日でもあり、当日は大殿が満堂あふれ、念仏の声が堂内外にこだまする中で行われるこの行事は、参詣者のころをすつよく引きつける。京都の人はこの行事をすませると「暮だなあ」という実感をもつのである。

三十一日、除夜の鐘がいんんと響きわたる。凍てついたしじみをやぶって、津々浦々に響きわたるこの鐘は、百八打ちならされる。百八の煩惱を洗い清めて新玉を迎え、平和なよき年を祈る除夜の鐘である。

ゆきのうちに仏のみなをとなうれば
つもれるつみぞやがてきえぬる

——法然上人——



法然上人の世界(三)

——一枚起請文にみちびかれて——

亜細亜大学教授 梶村 昇

このほかにおくふかき事を存せは、二尊の御あはれみにはつれ、本願にもれ候へし。念仏を信せん人は、たとひ一代の御のりをよく／＼学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともからにおなしくして智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念仏すへし

一枚起請文の最後の一段である。一枚起請文と現代社会問題などというと、実にかげ離れたもののように思われるかも知れないが、そう思うこと自体が、すでに信仰を現代社会と無縁にってしまったことであり、また、それが宗教を観念的に、現実遊離なもののように、人々にも思わせ、事実、そうさせてしまっている所以であろうと思われる。そうではな

くして、われわれは上人の信仰をたずねることによって、現在の社会問題の解決に迫り、文化科学といわれるものの原理を求める程のもでなければならぬと思うのである。

この意味において、この一段も実に多くの原理を含んでいられると思われる。最初の「このほかにおくふかき事を存せは云々」という一節であるが、これは端的に言えば、往生浄土には念仏以外に「おくふかき事」など一切のものは不要であるということである。しかし、現実にはわれわれの生活を振り返ってみると、不要といわれた念仏以外の一切のものにこだわっているのではなからうか。そして、その「念仏以外の一切のもの」を社会と称し、その社会を理想化しようとしてい

る。たとえば、社会には差別があつてはならない、万人は平等でなければならぬと説いている。そして、この平等無差別の理念を現在の社会改革の最高の理念のように思っている。しかし、虚心に人生の事実を凝視すれば、現実には、人の顔がそれぞれ相違しているように、その性格も能力も相違していて、一つとして平等無差別のものはない。現実の人生は永久に不平等であり、無常である。この事実を無視して、やれ解放だ、変革だと騒いでみても、結局それは、不可能なことを可能にしようとしていることであるから、現実社会を修羅の巷にする以外の何ものでもない。事実、不幸にして歴史がそれを示してきたし、毎日身近に、われわれが新聞紙上で見てきていることである。

といつて、われわれはこの差別不平等の世界に安住することとできない。とすれば、われわれに残された道は、この差別不平等の世界において、平等になる可能な道を探すこと以外にあるまい。そのような道があるのであらうか。上人はそれを念仏の道であると教示されたのである。念仏の道には差別不平等はないのである。

上人の帰依者に阿波介という性愚鈍なるものがいた。しかし、彼は熱心な念仏信者であつて、ひたすら念仏を称えていた。ある時、上人は弟子に向つて「あの阿波介の申す念仏と

私の申す念仏とどちらが勝っているか」とたずねた。弟子は即座に、「それは上人の念仏が勝っています」と答えた。上人は「お前たちは念仏がわかつていない。阿波介の念仏も私の念仏も何の差別もないのだ」と答えられたという。

この逸話は、まさに念仏には差別のないことを示す好例である。念仏ということにもしこだわりがあるならば、平等の世界とはこのように内心に味あわれるものであるといつてもよい。不平等のこの現実社会において、平等無差別の世界は、われわれの内心において可能なのであるといふことである。会社の社長は小使さんよりえらいとみるのが、現代の価値観である。たしかに小使さんが直ちに社長になることはできない。この差別をどうすることもできない。しかし、人間の内的事実において見るならば、そう簡単に人間の高下を判断することはできない。小使さんの方が遙かに社長よりも立派な人物であることもある。もし、平等無差別の社会を希望することがわれわれの願いであるならば、われわれは価値の基準を変更すべきである。富貴榮達、地位名譽に人間の価値基準を置くべきではなく、すべての人は平等に人であるといふところに最後の基準を求めなくてはなるまい。

「このほかにおくふかき事」といい、「たとひ一代の御のりをよく／＼学すとも」ということは、上人が『選択集』の

中で「若し夫れ造像起塔をもて、本願としたまはば、貧窮困乏の類は、定めて往生の望を絶たん云々」といい、それに続いて、同様の筆法で富貴貧賤、智慧高才愚鈍下智、多聞多見少聞少見、持戒持律破戒無戒に言及されていることに相当するのであり、このような人生の外的差別に執着している限り、それは「二尊の御あはれみにはつれ、本願にもれ」るものであると示されているのである。平等の世界は内心に味あわれるものであるということである。

つづいて「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともからにおなじくして智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念仏すへし」と申されている。「一文不知の愚鈍の身になして」という箇所、私は長い間ひっかかっていた。というのは、前号で述べたように、われわれはすでに知恵の木の実を食べてしまつて、今更、「一文不知の愚鈍の身」になることはできないではないか、という思いがあったからである。このことを上人はどうされよといわれるのであろうか、と長い間迷っていた。

しかし、それは私の理屈であつたことに気づかせられた。このような理屈のことで自体が、信仰を観念的に受け取っていることを示す実例なのである。自分は「一文不知の愚鈍の身」ではないのだというぬぼれがあつたのである。上人

は「愚鈍の身になして」といわれるが、この「なして」ということは、それに「なつて」ということではなく、「愚鈍の身である」と痛感して」ということであつた。AからBになるということではないのである。AがそのままにBなのである。自分がそのままに愚鈍の身なのである。愚鈍の身であれば、かの愚かなる周利槃特のように、「たゞ一向に念仏」する以外に方法はあるまい。

人間の浅はかなる知恵を働かして、人間の知恵をもつてしては測り知ることのできない世界を、何とか片付けてやろうとするところに誤りがあるのである。上人が冒頭にかかげられた「学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず」といわれたことは、まさしくこのことであつて、「念の心」というようなものは、人智の計量の産物である学問によつては測り知ることのできない世界なのである。



奈良、平安と六〇〇年にわたつた日本の仏教の歴史が、仏教という人生に最も密着した教えを、無味乾燥な、現実遊離の、観念的宗教と化してしまつた。法然上人の出現は、まさにこれを改革するためのもので、仏教は人生そのものの中に生きることになった。しかしながら、それ以後現在に至る間に、仏教は再び固定化し、仏教の学問もまた理論の追及に終

新刊紹介

林 靈法著

『法然人生論』

—現代人生論法話より—

A五版 二六三頁
定価 五〇〇円(千一二〇円)

発行所

京都市左京区京都大学前
雄渾社

始し、天台、真言、浄土、禪等々の名目によって教義を区別することをもって仏教研究のすべてであるかのように錯覚し、みずみずしい情意は涸渇するに至った。それは西欧伝来の学問の概念が、仏教そのものの研究にまで及んだ結果である。

われわれが法然上人の世界に思いを馳せ、それを現代に生かそうとするならば、上人が平安朝仏教の改革に志された基本的態度を学び、それによって現代の諸問題に立ち向っていかねければならないと思う。私の「一枚起請文」の理解は、伝統の解釈とは非常に異なるものがある。それは以上のような私の理解によってなされたものであり、これが現実に入人の信仰思想を今に生かす所以であると思ったからである。大方諸賢の御高評を乞う次第である。(四七・一〇・二二)

表紙の解説

群馬県太田市

大光院

「子育て吞竜」という名称で親しまれている吞竜上人を開山とする大光院は、浄土宗関東十八檀林の一つである。当院の由来は、慶長十八年徳川家康公が、その祖新田義重の追善のために当地に創建したもので、義重の法名にちなんで現寺号「大光院」を称しているが、正式には義重山新田寺という。その後の当院は、徳川氏から寺領として三百石の寄進を受け、元和八年には常紫衣の勅許を賜るなど、手厚い保護のもと関東有数の寺院になったのである。

開山吞竜上人は高德で聞え、遺徳をしたうもの多く、ことに前述の名称をみるまでもなく、育兒に関する教化・保育で知られている。表紙の絵は松濤画伯が「吞竜上人捨寺孝子一命之図」と題しているが、これは上人がある正直な子供が、当時禁じられていた鶴を殺したために、一命をおとすことになってしまったのを、寺を捨ててまで救わんとした故事によったものである。これからも分る通り、上人の育兒に対する愛情の深さを知ることができる。なお九月七日から三日間行なわれる開山忌には、こうしたことより安産子育てのため、近郷からの参詣者でにぎわっている。



快 楽 と 快 楽

— 武田泰淳氏の近著に寄せて —

竹 中 信 常

(大正大学教授)

「俗世の快樂(カイラク)から脱け出すことが、仏弟子たるものの快樂(ケラク)である。

『身心快樂(ケラク)』にして、禪定に入るがごとし』と教えられた、あの『けらく』とは、俗人の熱望する

『カイラク』と、正反對のものなのである。『カイラク』をほしがる者は、永久にけらくを得ることができないのだ。カイラクの密林をさまよい歩くことが、もしも極樂への前進であるとしたら、おシヤカ様は、な

ぜ別に、精神的けらくのレールを、その密林に敷かせる必要があったのだろうか。仏教のレールを走る法の車のみが、救いの地に到達する『棄物』だと教えられているのに、車の窓の外の、欲望つまりカイラクの花々に手をさしのべるとは、おかしい仕業ではないのか。」

十九歳の浄土宗の青年僧、柳のこうした設問から出発して、武田泰淳氏の近作「快樂」は「性と政治と仏教」をめぐる展開している。著者はこういつている。

「キリスト教でも、仏教でも、おそらく回教であつても、聖職者ぐらい世の中で恥しい想いをしなければならぬ者はない。寺に生れ、頭の毛を剃つて、異形の者となつた私にしても、坊主になつた時は、恥しさとともに他人にははかりしれぬ悩みがあつた。禁欲！その矛盾にみちた青年僧侶の眼から、自然を見つめ、肉体を見つめ、真実を見つめ、戦争にのめりこんでいく時代の青春と政治運動の周辺を描こうとした」

一度は、誰かが、どこかでとり上げねばならぬ、仏教者の精神的苦悩の遍歴を、刻明に描き出されている。

二

文学的作品を現実に引き戻し、登場の人物や場所や出来事を、實在のそれらに引き当ててとやかくいうことほど、愚かしいことはない。それらはかりに實在のものであつても、著者の文学的な心情によつて濾過されたものであり、それはすでに私たちの世界のものではないのである。——そうは思つても、著者とほぼ同じ世代に生活し、著者がかつて持つた生活条件と似た条件のもとに生

きるものにとつて、そこには少からぬ親近感と関心とが寄せられる。

一体、仏教とか信仰とかというものは、外部世界が変動すればするほど、内に深くかえりみられるものなのである。大正デモクラシーの末期に青春時代を重ねたものにとつて、当時吹き荒れた赤色旋風や反宗的の嵐しのために、かえつて、仏教なり、そしておのれの信仰というものを、改めて見直おす機会を持ったのである。そのことが、果して良かったか、悪かったかはとに角として、世界には、激変するものと、いささかのゆるぎない不動のものとのあることを、肌に感ずることのできたことは幸いであつた。

このことは現代にもいえることである。新たに三極時代を迎え、世界は地球的な規模のもとに変革されようとしている。日中復交という一事でさえも、日本の仏教界、宗教界には決定的な影響が予想される。かつて、われわれの身のまわりにも、変革と革命のために奔命し、努力し、そして捕えられた若き仏教者が出た。そして、それらの人々は武田氏を含めて、現に、その社会をともしているのである。それゆえ、少くとも浄土宗に籍をおくものにとつては作品中に出てくる人物の大部分のも

のがなんらかの意味でかつてかわりがあったし、また現にかかわりを持っているのである。ただに、その実在性を感じるのみならず、みづからの若き日に抱き、年代と時代と共に、厚いベールでおおいつて、敢えて再びふりかえろうとせずに、魂の奥底に沈澱させていたものが、掻き出されて、白日のもとにさらけ出されたような感懷を抱かされるのである。

「浄土宗では、ナムアミダブツと唱えさえすれば、救われるということになっていますが。日本は浄土宗があるから、ナムアミダブツと唱える人もいる。その人たちが、ゴクラクへ行けるとする。しかし、日本以外の場所では、どういうことになっているのですか。日本のほかにも、人間はたくさん生きていますし、ナムアミダブツという日本語を知らない人々も、いくらでもいる。知らない人の方が圧倒的に多い。たとえば、ハワイや南洋の土人なんか。バラオやアンガウルなんか。そういう人たちも、死ぬときは死ぬ。毎日どんな死んで行く。そういう人たちは、救われないことになるんでしょか」

「日本語を知っている日本人だって、なかなかナムア

ミダブツは唱えませんから。まして、日本語を知らない、よその土地の人々が今後、何年たったらナムアミダブツを口にするか、わかったものじゃありません。そのあいだにも、何十万、何百万という人間が、自然に死んで行く。ナムアミダブツの救いとは、全く無関係に死んで行く。たまたま日本に生れて、ナムアミダブツの教えを日本語でききとれた人はいいけれど、そうでないほかの人たちは、そんな言葉がこの世にあることも知らないまま、死んで行かなくちやならないわけでしょう。そこところが、何となく、たよりないような、不合理なことのよう気がするのですが……」

えらい仏教学者である柳の父親でなくとも、このような、素朴で、しかも痛烈な疑問に答えることは至難のわざである。そこで、父はこう答えている。

「……その点は、おれだって苦しいよ。矛盾もあるし、不徹底でもある。大げさに、世界を相手とすること、むろん、できないし、身ぢかなところ自分自身のことだって、うまくいかない所もある。恥ずかしい所

もあるさ。それを、ごまかそうとするつもりはないよ。ただ、今のおれとしては、お念仏が一ばん身に合っているんだ」

この答えは、柳の父の答えであると同時に、現在、念仏者であることを看板にしている浄土宗の僧侶たちが、精一杯のところでいえる答えでもある。あるいはむしろ、こう答えることすらできないものの方が、多いのではないだろうか。

三

武田泰淳氏の風貌に接した人や、またテレビなどで氏を知る人は同感だろうと思うが、決して、大むこうを唸らせるような人柄ではない。むしろ控え目で、その会話も咄々として決して流暢とはいえない。それでいて、その底には、鋭い思考と透徹した英知が秘んでいる氏が深くその身につけておられる中国哲学の教養が、そのまま着物を着てあらわれたような感じがする。氏の父君を学問の師として持つ筆者にとって、武田氏は父君のイメージとダブって描かれる。父子ともに、内に激しく燃える

ものを秘めつつも、外に平静であり、温篤である。

そのような武田氏にして、その内心の閥歴が「快楽」に描かれている如く、極めて多彩であり、奔放であり、深刻であることは、逆説的には、むしろ当然なことなのである。人にむかつてはなしに、おのれ自身にむかつての問いかけであり、叙述だからである。

したがって、そこに描かれている精神の流れは、柳という一人の悩める浄土宗青年僧を通して、全浄土宗僧侶の、さらにいうならば全青年仏教者の精神の流れへと大きく展開して行くべきものである。

そういう意味からすると、この本「快楽」は現代の仏教青年の悩みに通ずるものであり、現れの仏教者への「問いかけ」でもあるといえよう。

あとがきにもあるように、目下、療養中のために中断の形で終っているが、この「問いかけ」に対する回答は、われわれ浄土教者一人一人が、みづからにおいて試みるべきだと思う。

武田泰淳著・快楽・全二巻・新潮社・各巻七百年

す い そ う

「心のささえ」



杉田 義俊

(神奈川県葉山町相福寺住職)

先般宗命によって、南洋「ボルネオ」に遺骨収集並に慰霊供養のため、遺族の方と昭和四十四年一月十八日、「ボルネオコタキナバル空港」に向って出発することになりました。その前夜一行は増上寺に集合一泊し、翌朝法要に参列、椎尾大僧正より、法話訓誡をいただき、途上の交通安全祈願までして頂き、一行感謝申し上げ心に「ささえ」を感じて、念仏して朝九時二十分「マレーシヤ航空機」にて、いよいよ出航いたしました。

途上何等の障害もなく、同日十七時二十五分無事現地ボルネオコタキナバル空港に到着。さすが南方暑さきびしく、日本の真夏の如く汗がにじみ出て、一行は漸く、おちついて顔

にハンカチをあてて、やっぱり暑いな！と思いつつも、はればれと話ししながら、笑いもとび出す元氣であった。ことに今回の団長国武先生は、戦時中当「ボルネオ」の司政官であられたとのことで、しかも、その当時現地の酋長であった顔氏一族が挙って出迎えて団長国武先生を見るや、酋長なる人顔氏は、とびつく様に、走りより、久々の再会で、大変うれしく師弟の間柄の様に親しくなつかしく、国武先生と固い握手をかわし落涙しておられた。私共一行は土人と余りにも親しいので、どうしたことだろうと不思議がっておりましたが、それはかかるエピソードがあるのです。

国武団長が戦時中「ボルネオ」の司政官であられた時「ボ

ルネオ」住民の「スバイ」によって日本軍は非常な損害と多くの犠牲者を出したのです。日本軍進駐して来るや、彼等住民スバイに関係のあった人六百有余名、直ちに銃殺ということになりましたが、その銃殺者の中には顔魯長その人も加わっていたのです。顔魯長は直ちに国武司政官に助命願をし、曰く「私は決してスバイではありません。むしろ日本軍のために働き、いろいろと便宜を与えた、どうか命を助けて下さい」と。国武司政官もそれをよくご存知であったので、自ら軍に交渉して助命を願われました。しかし日本軍は頑として応ぜず、銃殺と決定したのです。そこで国武司政官は非常な決心をいだかれ「もし彼魯長顔を殺すなれば、どうかわしを先きに殺してから顔を殺してくれ」と嘆願せられましたそう、軍にも遂に国武司政官の正意が通って魯長は助命されたのです。

かかるいきさつがあったので顔魯長は命の大恩人国武先生のために一命を通して、献身的に吾々の遺骨収集の作業には、一家一族挙って協力されたのです。かくして私達の遺骨収入は全く何等の支障もなく、何の障害もなく、スムーズに運び、非常に好結果に終り、また土地の土人等とも非常になごやかに運ばれて、遺族の方々も気持よくそれぞれの戦死の場所に行き、お骨等も持ち帰って、久々で温かいその心をわ

が身の心の「ささえ」として日日朗らかに正業に働んで仏の加護並にその靈魂に感謝したのであります。かの見るからに気味悪い魯長顔氏がやさしい仏の様な心根になり、心の転換をして固い信仰に入られたのは、つまり国武先生の温かい慈悲心を知って感銘深く、心の中に国武先生あのやさしい身命を賭しての恩義に感激して、その不惜身命の心が顔その人の心の「ささえ」となったのだと思います。実に偉大な事です。所謂国武先生の心が精神が顔氏の心と合致した訳です。例えば赤子がよちよち歩きの時杖をたよるとして一歩一歩歩きますが、だんだん大きくなるに従って杖のたよりも必要なく一人で歩行する様になります。これは杖そのものが不要でなく、杖は頼子の心の中に「ささえ」となって中に入ってしまったわけです。だから思い出した時は杖に感謝することもありましょう。

私達も常に心の「ささえ」となる何ものかを感じる必要があります。これらによって私達は常に教えられ「ささえ」られておるわけです。心の「ささえ」のないということは人生において最も悲しいことです。「ささえ」によって心の転換を得られる訳です。転換は信仰に入る第一歩だと思います。思えば世の美事は私達の心の大きな「ささえ」であります。私達心して精進すべきであると思います。

韓国の寺めぐり

安居香山

(大正大学教授)



＜東国大学にて＞

ヒゲバス旅行

さそわれるままに、十月三日から五日間、韓国を訪問してきた。たった五日間ではあったが、極めて効果的に大学や寺院を廻ってこられたのは、ヒゲ先生のお蔭である。これは大正大学の関口教授が、その人にささげたあだ名ではあるが、ソウルの東国大学の仏教学の立派な教授で、日本にもなじみの深い人である。写真で見ると、誠に立派なヒゲの持主で、日本語と英語がペラペラである。写真を見られた序に言っておくが、左から宮林昭彦先生、李榮子講師、小生、佐藤行信先生とヒゲ先生である。従って、この時の旅行は私を含

めてこの三人である。李榮子女史は、実は三年前に、大正大学大学院の博士課程を終えた人で、已に東国大学の講師として、仏教史や仏教概論を調じている才媛である。東国大学を訪れた時、校庭の真中にある、この大学のシンボルである仏像の前での記念写真である。

ところでこのヒゲ先生とは、徐景洙教授で日本に來られた時、私も一席を共にしたことがあった。こんなわけで、今度の韓国訪問の案内は、すべてこのヒゲ先生がして下さった。ソウル飛行場への出迎えから始まって、四泊五日の旅行を、まさに寝食を共にして案内して下さいました。そのお蔭で、短いこの旅行を、要点的に効果的にやってきたわけである。

この先生のヒゲは、単に素晴らしいというだけでなく、全く韓国中有名であると言っても過言でない。仏教寺院だけでな



＜普門寺山門＞

く、大学や美術館、そして料理屋に至るまで有名なのである。そして、幾つかの難関を、このヒゲのためパスして、参拝参観してきた。まさにわれわれは、ヒゲパス旅行をしてきたわけである。

美しい尼寺

短い期間であつたので、そんなに多くの寺を廻ってきたわけではない。しかし、徐先生の選択で、代表的な寺をいくつか廻ってきた。ソウルでは普門寺という美しい尼寺に参拝した。韓国に来て始めての寺訪問があつたため、特にその感懐を深くした。

何が美しいのかということであるが、いろいろな面が美しいのである。先ず第一には、寺の建物が美しい。カラー写真でないと分らぬが、極彩色でまことに鮮かである。材木はお世辞にも上等とは言えないが、その上に施した彩色は、五色の色で華やかという外ない。日本の社寺で言えば、東照宮と言えは当っているであろうか。何処の寺へ言ってもそうであったから、韓国の寺院は、昔からこんなに美しかったに違いない。とすれば、韓国を通して伝わった日本仏教の当初の寺院も、このように始めは美しい彩色を施していたのかも知れない。

第二に美しいのは、寺の境内である。よく掃除が行き届いている。これは、何処の寺へ行ってもそうであった。僧侶の修行は、一に掃除から始まるとされるのであるが、これを本当に実行しているのは、韓国の寺院かも知れない。普門寺は尼寺であるだけに、更に掃除は行き届いていた。

第三に美しかったのは尼さんである。ねずみ色の韓国独特の法衣を来て、取り次ぎに出てきた尼さんは、とても可愛いくて、美しかった。そして、とても清潔さを感じた。一体に、韓国の女性は美人が多い。これは、大きな発見の一つであった。何も日本の婦人が不美人であるというわけではないが、全般的に見て、女性に美人の多いことは、ヒゲ先生自身も認めておられた。従って、尼さんも又美しいわけである。ともあれ、普門寺の美しい印象は、それから後に訪れる寺院へのよき第一印象となつてしまった。

奈良に似た慶州の古都

私達は、ソウルに二泊して高速道路を一途南下して大邱に向つた。目的は韓国の大寺である海印寺に一泊して、僧堂生活を体験することであつた。ところが途中、扶余に寄り、百済の遺跡を訪ねている中に時間がたち、大邱に着いたのが夕方六時であつた。それから海印寺まで二時間かかり、とて

も不可能ということ、この大目的はあきらめてしまった。韓国の寺院は、曹溪宗という禪系統が殆んどで、浄土宗もあるそうであるが、数えるほどだそうである。海印寺はその代表的なもので、高麗版大藏經の版木を所蔵していることでも有名である。禪宗であるから、その生活も厳しく、九時就寝で、三時起床とも聞いた。坐禪を中心とした僧堂生活で、勿論肉食妻帯はしない。こうした寺院での体験ができなかったのは、残念の一語につきる。

大邱に一泊したわれわれは、翌朝、慶州の古都を訪れ、芬皇寺、皇竜寺跡を見、慶州の古都を訪れ、芬皇寺、皇竜寺跡を見、慶州博物館で、その昔を偲んだ。四囲の低い山並み、寺のたたずまい、そして、皇竜寺跡に並ぶ礎石を見るにつけ、奈良に在るような錯覚に促されたのは、私だけではあるまい。徐光生は礎石の上に立つて、

「ここに木造大塔がありました。この礎石の大きさと、塔の大きさが分りましょう」

と、いかにも感慨深げであつた。ここは、いうまでもなく新羅の都の跡である。私は、今は無いこの寺の塔を、日本の五重の塔などを連想しつつ、その昔を偲んでいた。

芬皇寺には、自然石を煉瓦にしたようなものを積みあげた三重の塔があつた。これも当初は九層であつたらしい。「青

△慶州の大石仏▽



丹よし、奈良の都は咲く花の」と歌われたと同じような景観がこの古都にもあったであろうが、今はただ物淋しく、わずかに慶州博物館に首だけの仏達が、数多く並んで、観光客の相手をしている。

不思議な大石仏

慶州には仏円寺という大寺がある。この寺は、山裾にあるのであるが、更にそれとは別に、十数キロもある山頂に石窟

庵があり、そこに一一・三フィートもある花崗岩の大石仏が祀られている。丁度こは、今観光道路の開発中で、自動車での通行は禁止されていたが、ここもヒゲバスのお蔭で一氣に山頂に辿り着いた。

ソウルの普門寺にこの石窟庵のミニチュアがあったが、本物のこれは、全く驚いた。新羅時代のだということであるが、花崗岩の一石造りで、大変な大きさである。

「この山には花崗岩が無いので、何処からか持ってきたものでしょう」

と徐先生は説明してくれた。花崗岩は確かに韓国に多いが、この山を見る限りそれらしいものはない。どうしても、何処からか運んできたものである。何の機械力も無い時代に、どうしてこれ程までに大きな岩を運び込んだものか。信仰の偉大さを感じるわけにいかなかった。

国宗のこの仏は、信仰の対象である為、撮影はゆるされなかった。口元を薄く紅くそめた美しいこの仏は、あやしいばかりに尊く感ぜられた。

辛い精神料理

韓国での料理が、どんなに辛いものであるかを、五日間身にしてみても味わった。五日間中、私の口の中は、火事が起って



〈梵魚寺の山門〉

いた。これには全く参った。しかし、僧堂の人々は、どんなものを食べているのであろうか。そんな興味は、私から消えなかった。仏国寺に参詣した時、石窟庵の孫慧光師のもてなしで、私はそのチャンスにめぐまれた。

何分にも、韓国の馳走にうんざりしていた時なので、飛びつくようにこの僧堂の精進料理に箸をつけた。日本の豆腐のミソ汁様のものが出た時には、まさに郷愁を感じて一気に飲んだ。ところがである。この味噌汁と違ってそれが、実は唐がらし汁であったのである。私はむせて咳をし、更には口の中はおろか、食道までが火の海のようになってしまった。すました顔をして飲んでいる宮林先生が、異国人のように見えた。この人は何処で韓国料理の訓練をしてきたのであろうか。

それからわれわれは通慶寺、梵魚寺という大寺を廻ってきたのであるが、その僧侶を見るにつけ、あの精進料理で、よくこのたくましい身体が出来るものと、つくづく感じ入った。唐がらしとは、一体どんな効用があるのであろうか。寒い時は温くなるということは知っているが、どれ程のカロリがあるのであろうか。

ところ変れば品変ると言うが、つくづく私はこんな事では本当の国際人にはとてもなれないと三省反省してみている。



浄土宗の陀羅尼（だらに）（二）

大正大学・梵文学教授 真野 竜海

浄土宗では、御施餓鬼の法要では、前回に説明した阿弥陀如来根本陀羅尼の外、次のような短かい陀羅尼が用いられる。

変食陀羅尼は、加持飯食真言ともいい、施餓鬼会の法要を行なうのに当り、浄食加持偈に続いて、願わくば、餓鬼道の苦しみ落ち、貪りの心あるものたちも、この施食を行なうことによって、迷いの世界を脱し、よき浄土に生まれるようにという心で、七返、唱えます。

次に甘露水陀羅尼は、妙色身（saurūpa）如来の真言で、妙色の原語のスルーパを分解して、スル（流れよ）、ブラスル（よく流れよ）というふうな文体になったものであります。妙色身如来は、五如来の一つとして、施餓鬼会には欠かせない仏様であって、餓鬼のみにくい姿を、円満なよき相好にし

て下さいという願をこめて請来し、祭るのであります。五如来とは、宝勝如来、妙色身如来、甘露王如来、広博身如来、離怖畏如来であって、それぞれに餓鬼の悪業を除き、恵みを頂くよう祈るのであって、一つ一つの如来名を、一つ一つの細長い布製の旗に記し、施餓鬼会祭壇正面に下げて拝みます。乳海陀羅尼は、毘盧遮那（びろくしゃな）一字水輪真言、普施一切餓鬼印真言ともいい、「一切の諸仏に帰命する、バン」という意であります。このさいごのバンは、お塔婆の背面に書かれる悉曇文字のバンと同じく、毘盧遮那（大日）如来を表わす種子でもある。しかし、また、お塔婆の正面の五輪形の上から、空、風、火、水、地を表わす、カ、ハ、ラ、バ、アと書かれる悉曇文字のバ、つまり、水（バーリ）を示すもの、水輪とも考えられ、すべての水を雨ふらして、全世界をうるおしてほ

〔変食陀羅尼〕 namah sarva-tathāgatāvalokite om sambhara sambharahūm

〔甘露水陀羅尼〕 namah surūpāya tathāgatāya tadyathā om sru sru

婦命す 妙色 如来に 即ち 流れよ 〃
prasru prasru svāha
よく流れよ 〃 スワーハ

〔乳海陀羅尼〕 namah samanta-budhānām vaṃ

婦命す 一切 諸仏に ヴン。

〔放生会陀羅尼〕 om sru sru prasru prasru svāha

唵 流れよ 〃 十分流れよ 〃 スワーハ

〔四智讃〕 om vajra-sattva-saṃgrahāt vajra-ratnam anuttaram

唵 金剛 薩埵が摂受する故に 金剛宝は 無上なり

vajra-^{〔aharma〕}vākya-gāyanāt vajra-karma-karo bhava
金剛の言詞もて歌詠する故に(汝は)金剛 業 を作す者 たれ

〔般若心経の呪文〕

gate gate pāragate pārasaṃgate bodhi svāha,

行ける 行ける一彼岸に行ける一立派に彼岸に行ける 菩提よ、スワーハ。

しいという願をこめたものとも考えられ、そのような意味で、水輪真言といわれるのでありましょう。この、毘盧遮那如来と、水という両方の意味で、毘盧遮那一字心水輪ともいわれます。施餓鬼会に用いられるのは、全世界の一切にふくまれる水は宇宙すべての真理そのもの、つまり法身である毘盧遮那如来のごとく、この陀羅尼を呪することによって、かぎりなく雨ふり、流れ出し、乳海を現出し、餓鬼を満足させ救われんことを願うのであります。

放生会陀羅尼は、甘露水陀羅尼の後半と同文である。ふだんは、とかく、殺生の心をおこしがちのわれわれは、放生会を行ない、魚貝等を、放生池や、河に放つて、慈悲の心を取りもとすよう祈るわけであるが、この陀羅尼は、放つに当って、魚貝よ、よく水に帰り、流れ去るように、という祈りの言葉であります。

四智讃は、金剛歌詠真言ともいい、阿閼あしやく仏の大円鏡智、宝生仏の平等性智、阿弥陀仏の妙觀察智、不空成就仏の成所作智の四智を讃えるための梵語の讃歌である。莊重優雅な讃がつき大法要の初めに、誦誦される。漢訳は、「金剛薩埵摂受故、得為無上金剛宝、金剛言詞歌詠故、願成金剛勝事業」(金剛薩埵の摂受する故に、無上の金剛宝を得たりと為す、金剛言詞の歌詠の故に、願わくは、金剛の勝れたる業を成さ

んことを)であります。

般若心経の呪文は、近ごろブームになりました般若心経の終りにある「揭諦 揭諦 婆羅揭諦 婆羅僧揭諦 菩提莎訶」です。そもそも、般若は、くわしくは、般若波羅蜜多といい、梵語では Prajāpāramitā (プラジュニヤーパーミター) となる言葉です。これは、どういう意味かというのと、別の分解の仕方もありますが、プラジュニヤー (prajā 智慧) の パーラム (pāram, 彼岸、究極に) イ (へ) 到達した) ター (状態) というふうに略、考えまして、明度無極、智度などとも漢訳されております。智慧の彼岸に行く、最高の状態となった般若波羅蜜多ということになります。到彼岸、彼岸ということばも、これから出てくるわけで、彼岸、つまり、仏の国、悟りへ行くためには、功德をつまなければならぬが、その大切なものの中の六つが、六波羅蜜といわれる布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧と呼ばれるものです。

このように見て来ますと、ちょっとわかりにくいような心経の呪文も、表の中の訳文と照らしもらうと、合点がいかれると思います。むつかしい言葉も、いろいろと解釈をしたり、言葉分解してみたりして、次々と新しく教えを展開していく方法が、あちこちに見られます。もともと、かならずしも、正しい文法による解釈だけでなく、いわば語呂合せの

ような、こじつけも多いのですが、これは、まちがいというものでなく、新しい理論や内容を作り上げたり、言葉をおかりやすくするためであります。ここでは、般若波羅蜜多が、分解され、陀羅尼風に、このような呪文になったと考えてよいと思われまゝ。波羅蜜多のイ (へ) 到達する) という動詞が、呪文では、ガム (へ) 到達する、行く) という動詞の過去のガタになり、般若は、智慧であって、悟り、菩提とされていきます。この呪文は、その意味で、最高の智、般若波羅蜜多よ、我も、般若波羅蜜多を行ない、悟りへも精進し、慈悲の心を持ち、菩薩道を歩まん、という自覚と決意を新たに、また、自らこのすぐれた神呪をとなえることによって、一切の苦が除かれ、真実にして、虚ならざる境に進むことのお守りを信じて、誦したいものと考えます。

(なお、陀羅尼の訳は、『荻原雲来文集』の「寺院実用梵語講録」によりました。)

☆

☆

☆



異僧眞覺

第十一回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

彼の手もとを覗き込んだ妙春は、

「一体これは何ですか手を六本も描いて、まるで阿修羅みたいではありませんか」

「阿修羅ではない。如意輪林観音だ。そうだな、まあ俺の守本尊といつてもよい。俺が此の寺へ来ることになったのも、来る途中お詣りしたのも如意輪様だ。そら、知っているだろう東洞院六角の六角堂の本尊だ。何も彼も如意輪様のお導きだな。ついさっきまで俺は唯の女体を描いていたが、今日からは貴方あなたを観音様に見たてて如意輪観音を描くのだ」

行者宿報設女犯 我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂

六角堂の柱に掛けられた聯の文字が彼の脳裏に甦えった。翌る日から寺の日課の終るのを待ち兼ねて、紙を延べ、妙春をせきたてたが、六臂の如意輪観音は容易に描けない。年末年始と和尚は在寺する日が多く、身も心も寒々と京の冬をすごす二人であった。眞覺は捗らぬ仕事に業を煮やし、妙春は彼の前に体をさらすことの出来ない不満をかこつようになつていた。

彼の彼岸法要を済ませると、和尚はまた布教に出て不在の日が多くなった。眞覺は、描き直し描き直した如意輪観音の絵を見せた。

「まあ、」



大蓮寺に蔵する礼拝仏。もと京都祇園の八坂神社拝殿に掛けられていた。

と妙春は声をあげた。

「真覚さん。貴方が何事につけても熱心なことは知っていますが、斯んなに描いたのですか」

「いや、全く恥かしい話で、どうにもうまく描けぬ。我ながら腕の未熟さというか、才能の無さというか、つくづくいやになる」

「いいえ、上手に現せないのは絵だからです。このように手が六本もある姿を現わそうとするならやつぱり彫り物でなければ無理なのではないのですか？　そうそう貴方は何時か楠の木で仏様のお頭を彫られたではありませんか。本尊様のお顔を真似て。あれなど随分よく出来ていたと思いますけれど」

「考えてみよう」

頭を抱えるようにして彼は寢床にもぐり込んだ。
翌る夜、

「妙春さん、貴女に言われて俺は一晚考えてみたがやつぱり貴女の言う通りだ。彫り物でやつてみよう。だが……」

と彼は言葉をやめた。

「だがどうしたのです？」

待ち切れぬ妙春が尋ねた。

「実は、あの仏様のお頭を彫る時、俺は人に見つからぬよう

に、本尊様のお顔を何遍も何遍も撫で廻したのだ。勿体ないことだとは思ったがそうしたのだ。そして掌に残った感触をそのままに彫りつけたのだ」

妙春は眼を見張った。

しばらく出するような声で彼は言った。

「妙春さん。貴女の体を触らせてくれ。そうすればきっと出来る」

「いやです」

つ妙春は思わず身を引いた。

「いや頼む。俺は馬鹿だ。貴女が教えてくれねば、筆では描き現すことの出来ぬ如意輪様を何十枚何百枚と描きつづけたことだろう。彫り物だ！ 彫り物でなければ出来ぬ！ 貴女の体を撫でて彫るのだ。さあ。裸になつてくれ！」

「でも。そんなことをすれば……」

進退谷まった妙春は蒼ざめたが、

「さあ。速く速く」

いどみかかりそんな真覚に、遂いに観念したのか、

「仕方がありません。その代り貴方は眼かくしをして下さい」

と、か細い声で肯った。

まだうす寒い春の夜の静寂に、一本のローソクの灯がゆら

めいた。

全裸の妙春は、おののきつつ全身をこわばらせて立った。その肌を頭の中から甜めつくすように、真覚の掌が這いずり廻った。乳房と言うには未だ固い胸のふくらみに掌が触れると、未通女の胸乳は、懸命にこらえる彼女の意志とは裏腹に隆起して止まなかった。

「観音様のお乳は斯んなに突き出てはいないぞ」

と言う彼の脇腹を、彼女の指がいやというほど抓った。

やがて彼の掌が、腹から腰へ、そしてついに柔かな恥毛に触れた途端、彼の全身はゴキッ！と音がする程に硬直した。

「ウウッ！」

というかすかな呻きと共に彼女は腰をよじり、その股間を一筋の生温いものが伝った。失神しそうになって倒れ掛る妙春、彼は慌てて抱きかかえたが均衡を失って共にどうと畳に倒れ込んだ。倒れたまま彼は尚妙春のその部分をまさぐった。

「灯りを消して」

妙春が喘ぎながらささやいた。

「もう駄目です……どうにでも」

うわづった女の声に彼はむしるように目かくしを取り白衣をかなぐり捨てた。全裸の二人が抱き合い、彼が自らの股間を

手を添えようとしたその時、

「ガラガラガラ……ドン」

と門の潜り戸が開いて閉まる音が響いた。

ハッ、と彼を突き飛ばすようにはね起きた妙春は、自分の衣類をひつ抱え奥の部屋へ、それでもさすがに足音だけは忍ばせて駆け込んだ。動作のろい彼も急いで衣服を整えると、玄關に和尚を走り迎えた。敷台に手をついた彼を、和尚は妙な眼つきでジロツと眺めやり、物も言わずに居間に入った。

「危いところだった」

と部屋に帰った真覚はつぶやいた。

「もうちょっとで俺は女犯を、淫邪戒を犯すところだった。然も尼僧を……何故あんな事になったのか？ やっぱり俺は只の男で、坊主でも、出家でもないのだ、ドタン場に来れば俺もただ一匹の雄でしかないのだ。たまたま和尚の帰山で避けられただけで、そうでなければ行くところまで行っていたらう。やっぱり犯したも同然だ」

思慮をまとめようとしながら何気なく袂に手を入れた彼は愕然とした。何としたことか、着ているのは妙春の着物ではないか！ 門の響にすっかり動転して二人は着る物を取りちがえていた。彼の短い着物と、何となく取り乱した彼の態度に和尚は何かを感じとったに違いない。その時の和尚の顔が

思い出された。真覚の顔からみるみる血が引いていった。

「もうどうにもならぬ。弁解の余地も無い。明日は師匠に詫びて、暇を貰おう」

そう腹を決めると彼は案外落ついた。

「しかし着物をこのままにしておく訳にもゆかぬ」

和尚の寝しづまるのを待って妙春の部屋に忍んだ。妙春は床に入っていたが眼だけは起きていて、耳もとでささやく彼の言葉に、小さいが悲鳴に似た声をあげた。

「それで和尚さんは気がついていいるのですか？」

「当り前だ。此の着物は俺には短かくて、チンチクリンだ。実は俺も慌てて気がつかなんだが、部屋に帰ってやっと気付いたのだ」

暫しの沈黙の後、妙春がぼそりと言った。

「もうおしまいですね。何も彼も」

「うん、おしまいだ。何も彼も」

二人は同じ言葉を繰返してじつとしていたがやにわに妙春の手が伸びて彼の腕を掴んだ。

「抱いて。抱いて下さい。もう何も彼もおしまいですから」

「ベシッ」

と妙春の頬が鳴り、奮然と起った真覚は物も言わずにその部屋を出た。

道

広谷への道

—高橋良和—

法然上人がはじめて念仏のおしえを人に説いたのは、京都の西山である。

そこにある粟生光明寺本山、浄土根元地と称しているのもそのためであるが、もともと最初に念仏のおしえを説いたところは、この本山の地ではなく、もう少し北西よりの西山広谷の地である。

このことについては、前にも一言ふれたことがあるので、御存知かと思うが、その広谷の地に、珍しいものが残っているのを聞いたから、再びそれを記したまでである。

十一月の紅葉まつりのとき、粟生光明寺を訪ねた際に、は

からずも、思いもよらぬ法然上人の縁りの地であることを知る資料があることを知らされた。

西山の広谷は、光明寺からかなり離れているが、その広谷に、法然上人袈裟掛の碑という自然石の大きな碑が建っていることである。

袈裟掛というのであるから、法然上人がここで袈裟をかけたところの名残りであると思うが、附近にこれ以外には、昔の住居のあとにも残っていない。

然し、法然上人がこの地に足を運んだということは、この碑で充分うなずけるが、ここに住んでいたのが、遊蓮房円照という僧である。

この遊蓮房円照のことについては、仏教大学の伊藤唯真教授が、法然上人との関係を研究している資料に、そのことが出ている。そして四十八巻伝のなかに、

浄土の法門と、遊蓮房にあへるこそ、人界の生をうけたる、思出にて侍れ

と記している。その遊蓮房がここに居たのである。

わたしも今度法然上人の童話集を出版するが、法然上人が比叡山をおりて、最初に訪ねたところは、西山広谷のこの遊蓮房のもとであったことをつづつたのである。

前々号で、法然上人が比叡山をくだった道は、走出路であ

るとしたが、その走出路から嵯峨を経て辿りついたのか、この広谷の遊蓮房のもとなのである。

それというのも、法然上人はこの遊蓮房について、自分のすすめる念仏のおしえの裏付けしてもらいたかったのではないか、とも思うのである。

その点についても、伊藤唯真教授は、

法然の下山は、遊蓮房に遇うためであり、そのために西山広谷へ向ったのだと考えざるを得ない、云々。

従ってこの下山はあくまで己れ自身のために行なわれたもので、教化のためではなかった。法然は自分こそ自分より下ではあるが、三昧発得の聖として遊蓮房を尊敬し、遊蓮房は法然を同法者として迎えたことであろう。

と記している。

そしてこの庵で法然上人は、遊蓮房に会い、おそらく、ここに二、三年は法然上人が在住したと思われるのである。

遊蓮房は、法然上人がこの広谷にやってきたことによつて安心したのであらう。よき念仏の後継者が出来たということと、身体が弱かったということから、その近くの善峰別所に隠棲しているのである。

そして日ならずしてここで法然上人を善知識として逝っている。この別所善峰は、今の善峰寺である。

法然上人は、この広谷にあつて、遊蓮房のあとを守つたのであるが、おそらくそれから二、三年あつてあらう、東山の吉水の禪房に移り住むことになるが、その吉水の禪房に対してこの広谷を、吉水内房と称しているということである。

粟生の光明寺を浄土根元地という。それは法然上人がはじめて念仏のおしえを人に説いたところであるということで、法然上人は比叡山をおりて、この広谷がきたのは、大衆に念仏を説くためであつて、そこではじめ大衆を救済したから浄土根元地であるというが、事実は遊蓮房円然との会見のためであつたと思うと、根元地の意味がもっともっと生き生きとしてくる。

法然上人は、ここでの在庵の期間は、毎夜の如く、遊蓮房との法談に花が咲いたことであらうと思う。

そうなってくると、ますます遊蓮房の存在が重要になってくる。

そういったことで、光明寺本山には、国国字に百年の際に、遊蓮房円照への報恩法要も併せて修行して欲しいとおねがいしている。

遊蓮房とにあへることぞ。

という四十八巻伝の一行のことばだ、もっともっと大事に考えたいのである。

浄土宗列祖の墨蹟をたずねて

美濃立政寺開山智通上人置文

今回は現在、岐阜市平田西荘にある浄土宗西山派の名刹立政寺の開山智通上人が、晩年に定められた置文の中から、当時における新寺建立の御苦勞振りを紹介してみたい。

西山派は法然上人の門下の証空上人によって開かれた宗派であり、西山派は更に分派して深草、峨嵋、東山、西谷流となった。その中で浄音上人の流れを汲む流派が西谷流である。西谷流は南比朗期に入ると京都の光明寺、禅林寺を本山として尾張に曼茶羅寺、美濃に立政寺という様に有力な寺院を新設して着々と散線の拡張に努めている。

この写真は署名はないが、筆跡からみて、智通上人の自筆の置文と考えてよいものである。これによると立政寺は文和三年（一三三

四）頃現在の地に建立されたようであるが、

その後まもなく智通上人の積極的な布教活動が実を結び、寺域に隣接した在地の土豪達の帰依をうけて立政寺の本堂として曼茶羅堂を建設している。浄土宗では曼茶羅はあまり利用されていないが、西山派は浄土宗の中でも天台の流れをうけた密教宗の色彩の強い宗派であり曼茶羅を非常に大切にしている。この立政寺の曼茶羅堂には最勝仏から釈迦仏まで九仏を中心に、廿五尊者と浄土五祖、更に法然上人以下証空・浄音等の八人の先徳像が寺内に配置されていたことがわかる。これは西山派寺院立政寺の特色である。

智通上人は石見の出身で京都で修学した後、仏教東漸の志に燃え関東下向の途中、伊勢大神宮に参詣したさいに、当地に法流を布

延すべしとの御告により立政寺を建立することになった。そして当地に至り衣地領主石河義監の知行地を買取り一寺を建立している。しかし当初は立派な伽藍を建立することができず人夫達を集め、自づからも参加し、苦勞して伽藍の造営に着手している。しかしその後智通上人の積極的な布教活動が実を結び、短期間のうち曼茶羅堂を始め南大門、談義所等多くの伽藍を建立して、更に当時の美濃守護土岐頼康、摂政二条良基等の帰依をうけ、ついには当時としては破格な常紫衣を後小松天皇から勅許される程の寺になっている。

このように智通上人一代の内に破格な発展をとげた立政寺であるが、智通上人は晩年になると色々な法度や置文と制定して寺の安定を計っている。この置文の中でも智通上人は門弟達に檀越を共調して、浄土の修学に励むようにと注意している。これに智通上人が新寺を建立するさいに受けた多数の檀越の献身的な協力振りがこのような置文を立政寺の草創や智通上人の人となりを知るのに恰好の史料であらう。

（宇高良哲）

奉新進之事
 此書乃智通上人遺文，其文多為佛經、論議、書牘等。其筆跡蒼勁有力，為日本書道之傑作。此書現藏於岐阜市立政寺（淨土宗西山派）。

岐阜市立政寺（淨土宗西山派）藏

「淨土」購読規定	一部 定価 百円 (送料十二円)	会費一力年金一、二〇〇円 (送料 不要)	淨土 十二月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可	昭和四十七年十一月二十五日印刷 昭和四十七年十二月一日 発行	定価 百円	編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行所 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二一八七番
-----------------	--	--	----------------	---	--	--------------	--	--

“御年始のご挨拶がわりにご利用を”

『浄土宝暦』

- ・一部 25円 (200部以上より 単価23円)
- ・送料実費 B6版 40頁

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学 『浄土宗読本』 覆 刻 版
の 名 著

価 1000 円 千 150 円

時代を越えて浄土宗の真髄を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

佐 藤 治 子 著

新 刊 『旅 日 記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

本誌で掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。
「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320 頁 単価 1,500 円 (千 140円)

発行所 山 喜 房 仏 書 林

御用のむきは本会までお申込み下さい。